



YAMANASHI



学校種間接続（小中高連携）

「活発な英語による言語活動」「一貫性のある評価」「個別最適な学びと協働的な学び」

本校における英語教育の現状・課題

- ①学校種間接続を踏まえた、英語による言語活動に重点を置いた授業づくり
言語活動を通して資質・能力を育成するための「中間指導」の在り方に課題がある。
- ②目標・指導・評価を一体化させた単元計画
単元終末のパフォーマンス課題・ルーブリックの設定、バックワードデザインによる単元計画を具体的に見直す必要がある。
- ③授業における個別最適な学びと協働的な学びの在り方
生徒の発信力の向上のために、学習者用デジタル教科書、異校種の教科書、ICTの活用について研究を進める必要がある。（デジタル教材等の活用した授業25%～50%）
【出典】「英語教育実施状況調査」より

本校における具体的な取組内容

- 研究テーマ
自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合う力の育成
～小学校の学びを活かした中学校への接続と充実した言語活動を通して～
- 活発な英語による言語活動
言語活動における目的や場面、状況などの設定。中間指導（ALTの効果的な参画）
 - バックワードデザインを意識した単元計画と一貫性のある評価
単元目標、パフォーマンス課題、ルーブリック等
 - 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実
学習者用デジタル教科書、小学校5・6年生の教科書、1人1台端末

提案授業 単元名「Unit6 A Speech about My Brother」（教科書名「New Horizon English Course I 東京書籍」）
学校種間接続におけるポイント・みどころ
小学校の学びを生かした「話すこと[発表]」の指導 効果的なチーム・ティーチングによる言語活動の充実
○目標に準拠した「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」の指導 ○JTEとALTによる中間指導の在り方（言語面・内容面） ○動画を用いた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

成果指標に基づく成果及び検証

- 課題①に関する成果検証 ※授業中の言語活動の割合50%以上
言語活動を行う際、小学校の教科書を使いながら、言語面と内容面の中間指導を行うことにより、目標や目的・場面・状況を生徒が常に考えながら言語活動を行うことができた。
- 課題②に関する成果検証 ※提案授業学習指導案参照
単元計画を立てる際、パフォーマンステストに近い言語活動を毎授業行うことで、一貫した指導と評価を行うことができ、単元目標を毎時間生徒が意識して学習していた。
- 課題③に関する成果検証
※GTEC SCORE「話すこと[発表]」全国平均値 +14.9ポイント
クローズドブックで自分の発表を録画する活動を日常的に行い、何度も自分の使用した英語を確認し、修正していくことに非常に効果があった。

今後の方向性

- ◎課題①に対して
引き続き、小学校や高等学校の授業を参観し、目標や言語活動の系統性を確認しながら、授業改善を図る。ALTとともに、目標に準拠した中間指導を行い、資質・能力を育成する。
- ◎課題②に対して
小中高で、CAN-DOリストに基づいたパフォーマンステストやルーブリックを共有する。今後も、単元を通して、生徒と「何ができればよいのか」を確認しながら授業展開を行う。
- ◎課題③に対して
異校種の学習者用デジタル教科書の効果的な活用についても研究を進める。また、「話すこと」（音声）から「書くこと」（文字）への指導においては、ドキュメントの音声入力機能等を使うなど、小学校の学びを生かした学習ができるようにする。



YAMANASHI



学校種間接続（小中高連携）

「活発な英語による言語活動」「一貫性のある評価」「個別最適な学びと協働的な学び」

本校における英語教育の現状・課題

- ①小学校で取り組んでいる「話すこと」の指導が、中学校の授業に活かしていない。
中間指導がパフォーマンス改善につながらず、言語面や内容面での深まりが見られない。
- ②中高連携の観点から、社会的な話題についての授業づくりの研究を進めたい。
日常的な話題から社会的な話題への系統的な指導と評価の工夫を図りたい。
- ③既習の知識及び技能を生かして、即興で自分の考えや気持ちを伝え合ったり、表現したりすることに課題がある。
ICT端末を活用し、個別最適な学びと協働的な学びを往還しながら、領域統合型の言語活動を通して発信力の向上を図る。
【出典】「研究指定校アンケート」「CRT検査」「全国学力学習状況調査」より

本校における具体的な取組内容

- 研究テーマ
生徒が主体的に取り組む「話すこと」に関する指導の工夫
～単元を通じたスモールトークと中間指導の実践～
- 活発な英語による言語活動
スモールトークと中間指導を計画的に実施し、言語面と内容面で充実を図る。
 - 目標と指導と評価の一体化
目標及びルーブリックを生徒と共有し、社会的な話題における指導の在り方を研究する。
 - 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実
ICT端末を活用して、生徒が既習表現を振り返られるように工夫し、発信力向上を図る。

提案授業 単元名「Unit5 Earthquake Drill」（教科書名「Here We Go! 2 光村図書」）

学校種間接続におけるポイント・みどころ

学校種間の接続を意識した「話すこと[発表]」の指導 日常的な話題から社会的な話題への広がり

○単元を通じた帯活動の指導 ○目的や場面、状況などを意識した課題設定 ○ICT端末を活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

成果指標に基づく成果及び検証

- 課題①に関する成果検証 ※授業中の言語活動の割合75%以上
単元を通して、計画的にスモールトークと中間指導を実施したことで、言語面・内容面での充実が見られた。小学校での既習表現や中学校で学習した表現に焦点をあてた。
- 課題②に関する成果検証
日常的な話題について、チャット機能等を用いて、自分の考えや気持ちなどを伝え合ったり表現したりする言語活動を行い、徐々に社会的な話題における発信力向上にも努めた。
- 課題③に関する成果検証
※GTEC SCORE 「書くこと」全国平均値 ポイント+7.9
社会的な話題においても、ICT端末を活用し、自分が使いそうな表現をクラウド上に蓄積、共有することで、課題に合わせて話したり書いたりすることができるようになってきた。

今後の方向性

- ◎課題①に対して
目的・場面・状況のある課題設定が難しい。生徒が必要性に駆られて、主体的に考え、判断し、表現できるような帯活動を行いたい。既習事項をスパイラルに活用していく。
- ◎課題②に対して
チャット機能やホワイトボード機能を用いることで、生徒は自分の考えや気持ちなどを表現するようになったが、社会的な話題については、文で書くことが多くなり、即興性が乏しくなった。引き続き、系統的な指導について研究を進める。
- ◎課題③に対して
生徒が使用した語彙や表現をクラウド上に記録して共有することだけにとどまらず、社会的な話題についても、生徒の考えが内容面・言語面でも充実できるよう、生徒が議論し、表現を洗練する場面を設定したい。



YAMANASHI



学校種間接続（小中高連携）

「活発な英語による言語活動」「一貫性のある評価」「個別最適な学びと協働的な学び」

本校における英語教育の現状・課題

①英語で自分の考えや気持ちを伝え合う言語活動の充実に向けて

研究指定校アンケートの結果（相川小のみ）によると、「英語が好きである、生涯において大切である」と回答する児童が大多数いる一方で、英語で自分の考えや気持ちを伝え合うことに苦手意識をもつ児童が3割程いる。実際の学習でも、英語でのやり取りに消極的な様子が見られるため、主体的に学びに向かう力等の育成をより図っていく必要がある。

②既習内容の効果的な活用

児童は、英語の学習の関連性を意識している様子があまり見られない。既習の単語や表現を言語活動を通して積極的に活用するための授業づくりについて研究を進める必要がある。

③児童の発達段階・学習状況に応じた適切な教師の英語表現の活用

英語教育の系統性や学習のつながりについて把握が不十分で、児童の発達段階・学習状況に応じた適切な英語表現についての理解を深める必要がある。

【出典】「実施計画・研究指定校アンケート」より

本校における具体的な取組内容

研究テーマ

個別最適な学びと協働的な学びが一体的に充実した授業をめざして

～ICTの効果的な活用を通して～

□活発な英語による言語活動

「目的、場面、状況等」を具体的に、そしてより現実的に設定し、主体的に学習に取り組む。

□個別最適な学びと協働的な学び

「1人1台端末」を用い、デジタル教科書などで既習内容を自由に振り返る時間の確保。

□一貫性のある指導・評価

教師が学習の系統性やつながりを意識して指導するために、「CAN-DOリスト」で確認。

提案授業 単元名「Unit6 What would you like?」（教科書名「NEW HORIZON Elementary 5 東京書籍」）

学校種間接続におけるポイント・みどころ

本物のゴールを設定し、児童が意欲的に学びに向かう授業づくり

○外国語活動「Let's Try!」等で学んできた既習表現を活用した指導

○児童の学習意欲を高める単元ゴールの設定

○スモールステップを意識した指導

成果指標に基づく成果及び検証

■課題①に関する成果検証 ※+8pt（研究指定校アンケート参照）

児童がやってみたくと思える「目的、場面、状況等」の設定をしたことで、やり取りなどに苦手意識を持つ児童が減少し、意欲的な回答が増えた。

■課題②に関する成果検証 ※+6pt（研究指定校アンケート参照）

苦手意識を持っていた児童が、授業の中で既習の表現を用いて伝えようとする姿が多くみられた。また児童の振り返りからも自分の成長を実感できた記述がみられた。

■課題③に関する成果検証 ※+9pt（研究指定校アンケート参照）

課題②を改善するために、単元のねらいの実現を見据え、「CAN-DOリスト」を用いてこれまでの言語材料や表現を確認したり、次学年や中学校での内容にどう接続するのか把握したりした。その結果、発達・学習状況に応じたスモールトークや中間指導などを行うことができた。自然な流れて児童と復習できた。

今後の方向性

◎課題①に対して

成果が得られた一方で目的を明確に児童と共有しなくてはならないという課題が見えた。今後は、身近な題材を用いてより明確に目的・場面・状況などを設定し、主体的に学習に取り組めるよう取り組む。

◎課題②に対して

1人1台端末を効果的に活用し、児童が個別最適な学びと協働的な学びに取り組み、さらにそれらが一体的に充実するように取り組む。

◎課題③に対して

児童の学習の系統性や連続性についての意識が不十分である。「CAN-DOリスト」と関連させたルーブリックや振り返りなどを活用し、児童の意識を高めていく。



YAMANASHI

学校種間接続（小中高連携）

「活発な英語による言語活動」「一貫性のある評価」「個別最適な学びと協働的な学び」



本校における英語教育の現状・課題

- ①目的・場面・状況を明確に設定した言語活動に重点を置いた授業づくり
言語活動の目的・場面・状況の設定が不十分なため、やり取りや発表において、児童が自分の考えや気持ちを思うように相手に伝えたり、発表したりすることに課題が見られる。
- ②授業における個別最適な学びの在り方
ICT端末などを活用した個別最適な学びの時間をどのように充実させていくべきか研究を進める必要がある。
- ③小・中・高10年間を見据えた「話すこと」に関わる指導の在り方
「話すこと」の小中高連携において、異校種との連携を進めていくために、異校種の指導法について知る必要がある。
「教師の見取り、研究指定校アンケートなど」より

本校における具体的な取組内容

- 研究テーマ
深く学び、考える児童の育成 ～見方・考え方を働かせる授業づくり～
- 目的・場面・状況を意識した様々な言語活動を通して、語彙や表現の定着を目指す。
 - 個別最適な学びの時間のもち方として、どのような学習スタイルがあるかのモデルを提示し、一人ひとり自分に合ったスタイルで学習できるようにする。
 - 異校種参観を通して、中学校や高校で「話すこと」の指導がどのように行われているかを知るとともに、中学校や高校との連携の在り方について考える。

提案授業 単元名「Unit6 I want to go to Italy.」（教科書名「Here We Go!5 光村図書」）

学校種間接続におけるポイント・みどころ

学習の個性化を図り、児童が主体的な学びを実現していく授業づくり

○「相手意識」「目的意識」を明確にした指導 ○外国語の「見方・考え方」を意識した中間指導の工夫 ○学習プロセスを定型化し、児童が安心して学べる場づくりの工夫

成果指標に基づく成果及び検証

- 課題①に関する成果検証 +29%（授業中のやり取り）、+12%（単元末などでのやり取りや発表）
児童が「話したい・伝えたい」と思う目的・場面・状況を設定し、言語活動を通して指導したことや児童が言いたいことを言えるようにするための中間指導、児童が学習の自己調整をする中で達成感を得られたことで、発信力に関わる項目で意欲の向上がみられた。
- 課題②に関する成果検証 +22%（ICTなどの活用）、+40%（授業中の発表）
学級づくりを充実させた上で、学びのプロセスを定型化させたことにより、児童はデジタル教科書やJamboard、動画の録画機能を自由に活用し、学習を自己調整しながら、発信力の向上を図ることができた。
- 課題③に関する成果検証
異校種参観を通して、中学校や高校で「話すこと」の指導がどのように行われているかを知るとともにCAN-DOリストに基づいた使用言語の系統性を理解し、授業に生かすことができた。

今後の方向性

- ◎課題①に対して
 - ・言語活動の中で目的を意識した中間指導の在り方を考えた指導をしていく。
 - ・思考・判断・表現の正確な見取りのために、対象の相手を複数人組み込んだ単元計画の作成。
- ◎課題②に対して
 - ・学習の個性化をより充実させるための指導の在り方を考えた指導をしていく。
 - ・個別最適な学びと協働的な学びのバランスを考えた指導をしていく。
 - ・児童が見方・考え方を働かせ、深い学びを実現するための指導をしていく。
- ◎課題③に対して
 - ・「話すこと」の部分において、小中高連携のさらなる充実を図る。
 - ・10年間を見通したCAN-DOリストの活用方法について模索していく。



YAMANASHI



学校種間接続（小中高連携）

「活発な英語による言語活動」「一貫性のある評価」「個別最適な学びと協働的な学び」

本校における英語教育の現状・課題

- ①英語の発信機会
授業中に「読むこと」と「聞くこと」を使う活動に比べ、「話すこと」「書くこと」を行う機会が少ない。
 - ②指導と評価の一体化
評価規準表等から何ができればよいかを理解し、パフォーマンステストを行っていると考えている生徒の割合が低い。
 - ③ICT機器の利用
ICT機器を使用して、英語の音声を聞いたり話したりする練習をしている生徒の割合が低い。
- 【出典】「第1回英語教育改善推進事業アンケート」より

本校における具体的な取組内容

- 研究テーマ
指導と評価の一体化 ～生徒にも実感できる発信力の向上～
- 活発な英語による言語活動
「目的、場面、状況等」「領域統合型言語活動」
 - CEFRに基づく一貫性のある評価
「パフォーマンス課題（評価）」「バックワードデザイン」
 - 個別最適な学びと協働的な学び
「ICT活用」

提案授業 単元名「Lesson8 Not So Long Ago」（教科書名「CROWN English Communication I」）

学校種間接続におけるポイント・みどころ

推論発問を行うことにより、教科書の深い読みを促している。生徒が写真のより細かな描写を複文にしたり修飾語を使ったりしながら表現している。生徒が読み手を意識して内容の順序を考えながら撮影者や被写体の気持ちを表現している。

成果指標に基づく成果及び検証

- 課題①に関する成果検証
第1回、第2回英語教育改善推進事業アンケートを比較し、授業内で「話すこと」「書くこと」を行っている生徒がともに増加した。GTEC においても成果が見られた。
- 課題②に関する成果検証
第1回、第2回英語教育改善推進事業アンケートを比較し、評価規準表等から何ができればよいかを理解し、パフォーマンステストを行っている生徒の割合は増えたが、授業で取り組んできたことを生かしていると回答した割合はさらに低くなった。
- 課題③に関する成果検証
第1回及び、第2回英語教育改善推進事業アンケートを比較して、ICTを利用して英語の音声を聞いたり話したりする練習をしている生徒の割合が依然低い。

今後の方向性

- ◎課題①に対して
「授業において、即興で自分の考えや気持ちなどを英語で伝えあっている」と回答している生徒の割合がほかの技能よりも一番低く、また第1回と第2回で変化が見られないため、即興的なやりとりの場面を想定した活動を増やす。
- ◎課題②に対して
授業で取り組んだことが生かせるパフォーマンステストの設定や、ルーブリックの中で取り組んだことを評価する項目を入れるようにする。
- ◎課題③に対して
「聞くこと」について英語の音声を聞いたり話したりする言語活動を取り入れる。また、中間指導として自分の音声を聞く活動をもっと取り入れる。



YAMANASHI



学校種間接続（小中高連携）

「活発な英語による言語活動」「一貫性のある評価」「個別最適な学びと協働的な学び」

本校における英語教育の現状・課題

- ①CAN-DOリストの修正と年間指導計画の作成及び小中学校との共有
本校はCAN-DOリストをアップデートせず使用しており現状に即していない。
- ②自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合う活動及び書いて伝える活動の充実
即興で伝え合う活動が不足していると感じる生徒が半数以上、また、書いて伝える活動の不足を感じる生徒は4割いる。
- ③ICT活用の促進
Teamsおよびロイロノートを活用し、個々の英語力を伸ばすよう工夫する。

【出典】「R5 第1回英語教育改善プラン推進事業アンケート」より

本校における具体的な取組内容

研究テーマ

英語で学び考える授業～教材内容を自分事として捉える工夫～

□ **CEFRに基づく一貫性のある評価「パフォーマンス課題（評価）」**

「目的・場面・状況」を設定し、生徒の意欲を掻き立てる。

□ **活発な英語による言語活動「目的、場面、状況等」**

自分ごととして教科書本文内容を捉え、生徒が深く思考することを継続して促す。

□ **個別最適な学びと協働的な学び「ICT活用」**

ICTを活用することで、フィードバックやライティングを容易にし、生徒間でのピアエディティングを目指す。

提案授業 単元名「Lesson7 The Fugees」（教科書名「My Way English Communication I」三省堂）

学校種間接続におけるポイント・みどころ

- ・小中学校でも行われているスマールトークを帯活動として実施。・教科書本文の要点や概要を把握し、深く学ぶことができるよう発問やワークシートを工夫。
- ・「自分事」として難民や移民に対して支援できることを考え、生徒の活発な思考を促すための「目的・場面・状況」の設定に注目！

成果指標に基づく成果及び検証

■課題①に関する成果検証

- ・現在の教科書や生徒の実態に合わせたCAN-DOリストになっていない。
- ・小中で行った活動を共有することで、難易度を調整しながら積み上げできる。

■課題②に関する成果検証

発問の工夫（事実、推論、評価発問）により深い読みを促し、毎時間ごとのスマールトークや目的・場面・状況を設定してinteractionやdiscussionを行うことで自分ごとと捉えることが促進された。GTECリスニング、スピーキング分野においても成果が見られた。

■課題③に関する成果検証

・ロイロノートによるライティングやフィードバックの提出により、日々の振り返りが授業外で容易にでき回収率が上がった。共有しやすく生徒の協働につながった。生徒本人が見返せず一貫性に欠ける。

今後の方向性

◎課題①に対して

- ・使用中の教科書及び生徒の実態に合わせCAN-DOリストをアップデートすることにより、英語が好きな生徒を50%以上に増やす。
- ・CAN-DOリストを近隣の小中学校と共有し、継続的な英語教育を目指す。

◎課題②に対して

- ・目的・場面・状況の設定をパフォーマンス課題や日常の授業で継続して行う。
- ・様々なレベルの生徒に対応できるような発問やプリントの工夫をする。

◎課題③に対して

- ・個別最適な学びを促すためListeningなどでの使用を試みる。本人が見返すことができるフィードバック形式を探る。